

# 資料が語る関東大震災

十時過江戸見坂を上り家に帰らんとするに赤坂溜池の火は既に葵橋に及べり。  
永井荷風「断腸亭日乗第一（大正6年～14年）」（『永井荷風日記第1巻』）

日暮れが近づいて、…もう空いちめんに積乱雲がはびこって、下町方面は火の海になっていた。  
…積乱雲は日が暮れると下界の火の海の光を受けて真赤な色に見え、夜明け頃になるとすっかり黒一色に変わり、朝日が出ると細かい髪を見せる真白な雲になる。はっきりと赤、黒、白と、変幻自在に三通りの色に変わって行った。  
井伏鱒二「関東大震災直後」（『荻窪風土記』）

赤坂  
(アメリカ大使館)



警視庁



皇居前



日比谷



芝浦



三日…海軍では連合艦隊以下、多くの艦船を派出して、  
関西地方からどんどん食料や衛生材料などを運び、ひな  
ん者の輸送をもあつかい出しました。  
鈴木三重吉「大震災火災記」（『鈴木三重吉全集 第5巻』）

東京の銀座のあとのやけつちのよこにつらなる地平線かな  
与謝野晶子「災後」（『女性改造』2(10)1923.10）

銀座



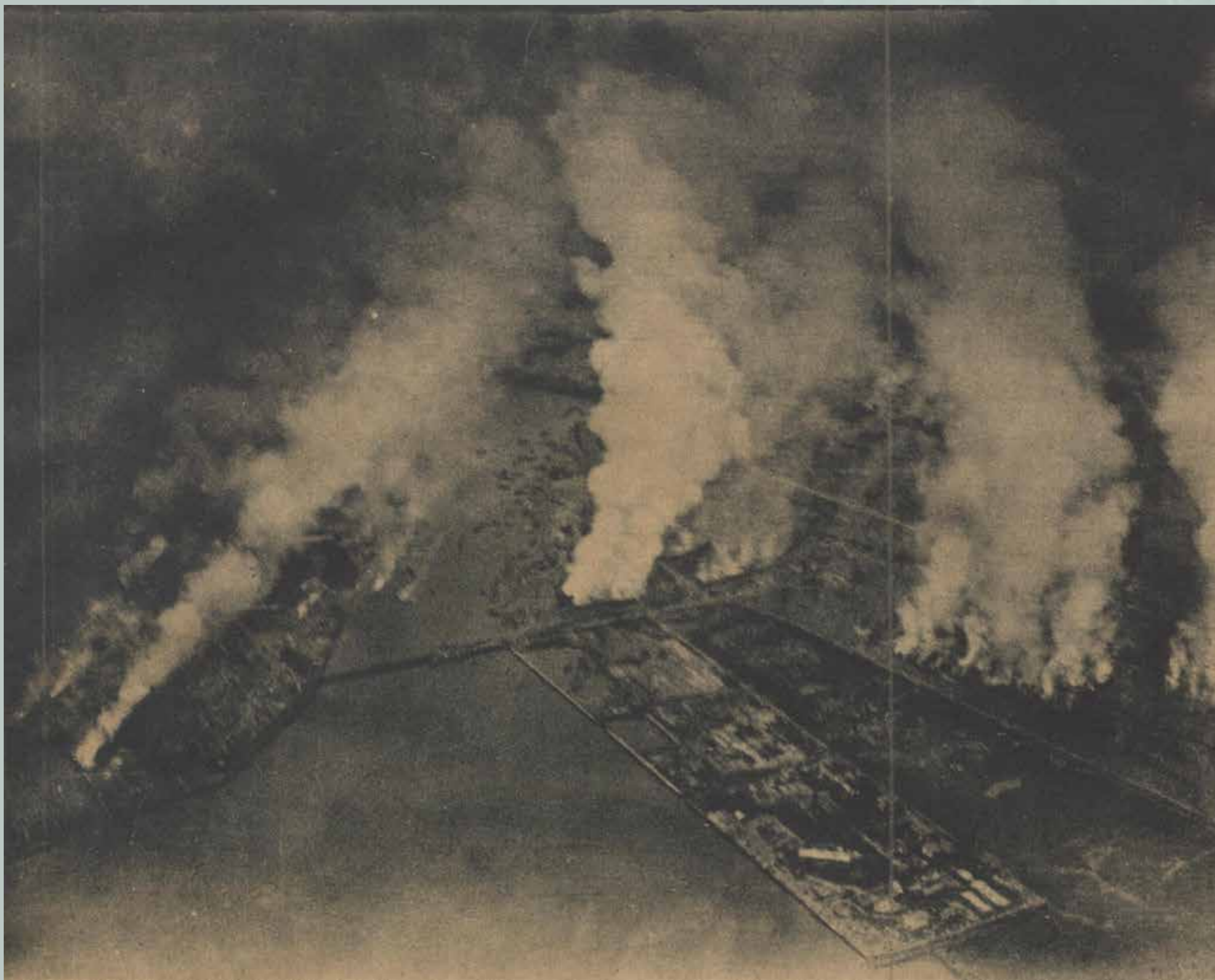
丸の内



僕は丸の内の焼け跡を通った。此処を通るのは二度目である。…きょうは  
僕は見覚えのある濠の向うを眺めた。…其処にきょうも三四人、裸の人人  
が動いていた。何もそう云う人人は酔興に泳いでいる訳ではあるまい。  
芥川龍之介「大震災雑記」（『中央公論』38(11)1923.10）

# 東京の被災状況

大川の岸は概して凄しい光景を呈していた。そういう人達に取つては、その川は  
実に生死の境であったのである。その川が一筋白く横わっているために、どうす  
ることも出来なかったのである。私は到るところに船が焼けてその上に二三人の  
避難者の黒焦げになって焼死しているのを眼にした。  
田山花袋「地震の時」（『花袋随筆』）



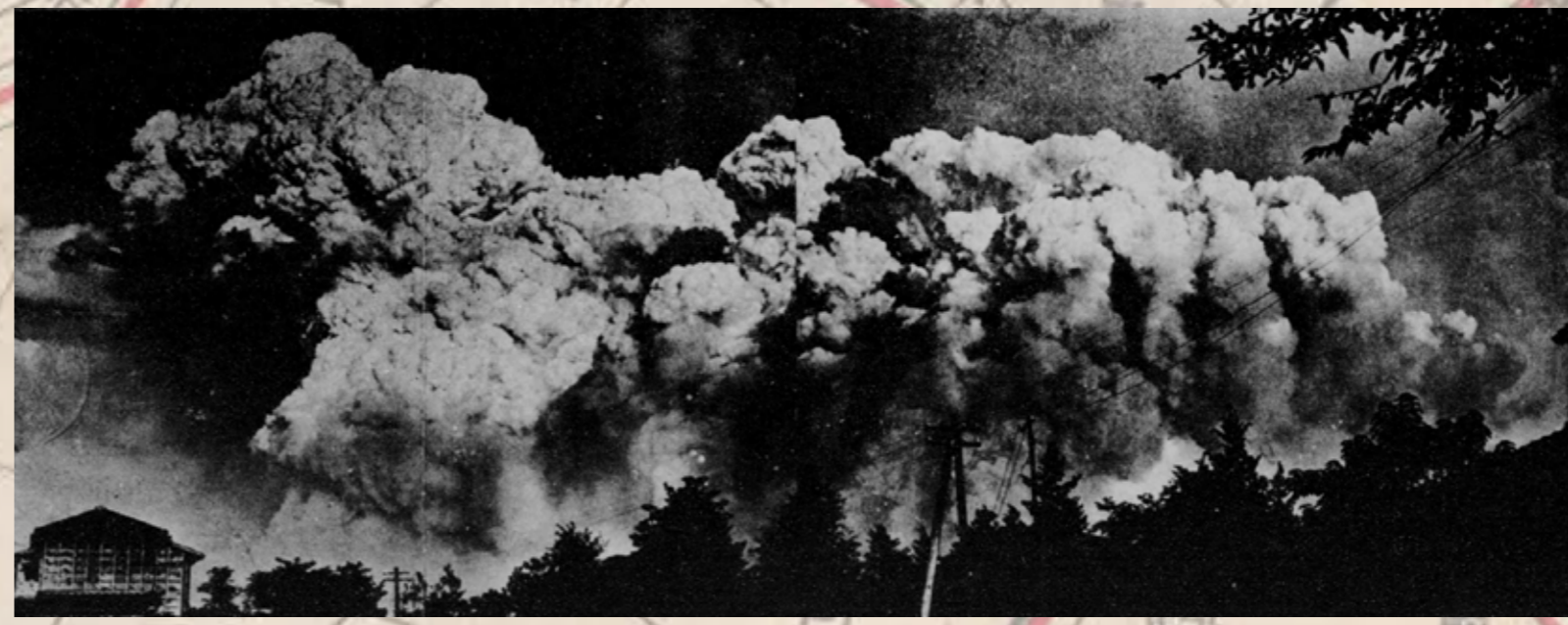
永代橋



深川



見ると…見渡すと…東南に、芝、品川あたりと思うあたりから、北に千住浅草と思うあたりまで、此の大都の三面を弧に包んで、一面の火の天である。中を縫いつつ、渦を重ねて、燃上って居るのは、われらの借家に寄せつつある炎であった。  
泉鏡花「露宿」(『鏡花全集 第27巻』)

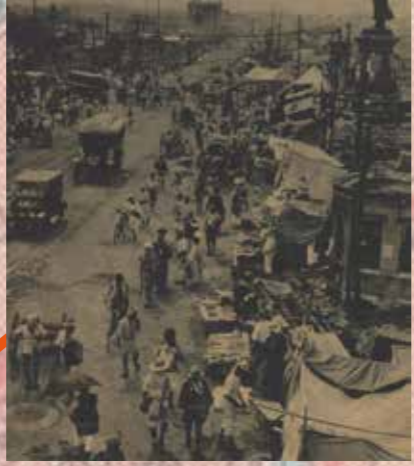


神田は地盤が弱くて倒壊家屋が非常に多かった。従って火の手は諸々方々から起った。  
和辻哲郎「地異印象記」(『思想』25 1923.10)

### 神田

官省、学校、病院、会社、銀行、大商店、寺院、劇場など、焼失したすべてを数え上げれば大変です。中でも五十万冊の本をすっかり焼いた帝国大学図書館以下、いろいろの官署や個人が二つとない貴重な文書などをすっかり焼いたのは何と言っても残念です。  
鈴木三重吉「大震火災記」(『鈴木三重吉全集 第5巻』)

### 和田倉門



### 帝国大学 (図書館)



上野公園は避難の人々で一杯だった。上野の森に火がつき避難民全滅というような噂を高崎辺で聞いたが嘘だった。  
志賀直哉「震災見舞」(『志賀直哉全集 第4巻』)

### 上野



### 神田橋



### 御茶の水



竹橋のところはお濠の水がすっかり乾上がって、人のむくろがそこかしこに散らばっていた。有名な店屋のしるしがついている買物包みをぶら下げて、盛装して倒れている女体が石垣のすぐ真下に横たわっていた。…この人たちはお濠に水がいっぱいあるときここへ逃げこんで、火災で一と嘗めにされた後に、お濠は排水されたかと思われる。  
井伏鱒二「関東大震災直後」(『荻窪風土記』)



### 日本橋

三越では四時頃に焼けないと確信して店員を帰したという。日本橋詰の店々では、その夜三越に火がついたときまでは逃げようともしていなかった。丸善の店員は六時ごろに同じく焼けないと確信して店を出たが、十時頃には焼けた。  
和辻哲郎「地異印象記」(『思想』25 1923.10)



### 浅草

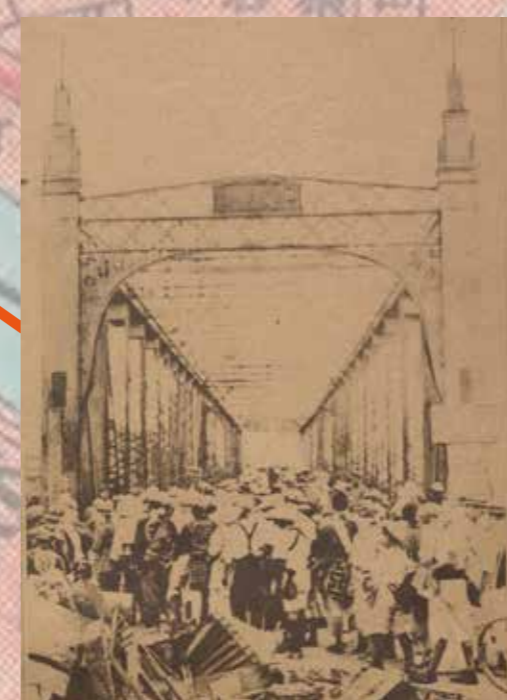
十二階の塔は、あれでなかなか、東京の人の頭にその姿を印しているらしい。地震で首を落してから、一層人気が出た。首のない姿が絵葉書になり、新聞雑誌に出たはもちろん、報知新聞の震災画報の表紙絵になった。  
川端康成「大火見物」(『文芸春秋』1(11)1923.11)



### 被服廠跡

中でも一番悲惨だったのは、本所の被服廠跡へにげこんだ人たちです。…本所かいわいの人たちは、だれもそこなら安全だと思って、どんどん荷物はこび込みました。夜になってからは、いよいよ多くの人が、むりやりにわりこんで来て、ぎっしりぱいにつまってしまいました。ところが、そこも、やがて、ぐるりと火の手につつまれ、多くの荷物へどもんもえ移って来て、とうとう、三万二千という多数の人が、すっかり黒こげになってしまいました。  
鈴木三重吉「大震火災記」(『鈴木三重吉全集 第5巻』)

### 吾妻橋



### 押上



本所横網町に在った富豪安田邸の焼跡を一見して、自然が貧富無差別に暴威を逞くした絶大の力に愕いた。赤貧野夫の身を以て一代に巨万の財を積み、俗衆羨望の的と成つて居た豪華な邸宅も、震災といふ大威力には抗し得ずして悉く烏有に帰した、斯る際には財力も何等の効なくて、一族の中には焼死した者もあった、泉水にはボロが浮み、焼枝には赤い腰帯やトタン板がひっかかっていた。いずれも旋風に巻き上げられた物であろう。  
宮武外骨「安田家の庭園焼跡」(『震災画報』第3冊)